

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	テオクリトス 第十一歌「キュクロプス」
Auther(s)	八木橋, 正雄
Citation	プロピレア , 26 : 118 - 113
Issue Date	2020-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050190">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050190</a>
Right	Copyright (c) 2020 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



テオクリトス 第十一歌 「キュクロプス」

八木橋 正雄 訳

愛を癒すために  
効く薬は つゆ ござりませぬ ニキアスさま！  
わたしにはそのように おもえます。  
塗り薬とて 粉薬とて 詩の女神ムーサイさまを  
措いては。  
得も知らず 癒してください、お優しい  
それは 人々の手のなかにありながら  
見出すは容易くあらず。  
なれど 識っています  
よくご存じであそばされることを

医者であり 九人の詩の女神に いと愛でられし  
あなたさまは。  
然して 安らかに 生きゆかれし わが邦の  
キュクロプス。  
古の ポリフェモス。  
ガラテアを愛されしとき まさしくこのように。  
ちようど口とこめかみのまわりに 髭が生えて来た頃。  
林檎とも薔薇とも巻き毛なども越えて  
熾烈な情念にとりつかれて  
すべてのことを忘れ去って。  
牡羊たちが 緑の草原から ひとりで小屋に帰るときも  
ポリフェモス ガラテアをうたいつつ  
やつれゆく 薬草茂る水辺にて  
あかつきのころまでも、  
キュプリスの いと悪しき傷 肝臓のなかに  
深くうがたれし 投げ槍の傷。  
なれど見出しぬ 癒す薬  
聳える岩に座して海をみつめ 歌った詩。  
ま白きガラテア 凝乳よりもまぶしく  
仔羊よりも優しく

牡牛よりも澁刺と 緑のぶどうよりもつやややかに  
なぜに 見捨てられたのか 慕うその人を。  
なれど あなたは ここに こられて、  
こころよき まどろみ われを とらまえて、  
足早に 御立ち去り、  
やすらかな まどろみ  
見放すは われを。  
あなたは 白き狼を見いだせる 牡羊のように  
去っていかれた。  
乙女よ、我はもえあがる あなたに。  
はじめて 母とともに  
山にてヒアシンスの葉など 集めらむと  
お越しあそばせられ  
我が 道案内をいたせしとき  
あなたを はじめて みそめしそのときより  
今もなお 燃えるわが胸 やすらぎをかち得ず。  
されど あなたは つれなき  
つゆ ゼウスにかけて つれなき。  
識る。いとしき 乙女よ  
なぜに 立ち去る その訳を。

三〇

眉くろく ひろがるる 片への耳から耳に  
ひとつの眉毛のように  
そしてひとつだけの眼 ゆったりとした鼻  
唇のうえに。  
されど その人 そのようにありつつも  
千の牡羊たちを育み  
牡羊から われの飲む われの搾りし  
かけがいのない 乳。  
夏とて秋とてきびしき冬とても  
チーズ われの許に 欠けることなく  
チーズこしの籠など 溢れるばかりに。  
われ パーンの笛も奏せませ  
この地のキュクロプスの誰ともかなわぬほどに。  
愛でし 甘き林檎。  
あなたのために歌い一つ  
しばし 夜も更け行く。  
われ十一のかわいい牝鹿たちを 皆の首飾りを飾りて、  
四のかわいい子熊たちとともに あなたのために育も  
う。

四〇

されど われの許に来たりなば、  
青緑色の海原をあとに 大地に身を投ぐるとも。

あなたは 心地よく

洞のうちに 夜 われのかたえに。

その洞には 月桂樹の樹々、ほっそりとした糸杉、

くろききづた、甘き実の葡萄の木

清冽な水、樹樹に満つるエトナ山の白き雪どけ水、

われのもとにアンブロシオン。

この地は あなたのお気に召しませんか

海と波浪に住まわられては。

さりながら われ 毛むくじやらで

お気分召されんでも、

柏の森 われの許にあり 灰の下には

燃え尽きぬ熾火。

なれど堪えましょう あなたに焦がされていく

魂とて、一つの眼とて、われには かけがいもなく

いとおしきもの。

口惜しき！ なれば母 わたしに鯉を持たせて

産んでくださらなかつた！

沈み入らぬため、あなたの許、御手に口づけを！

唇をお許し願えぬなら。

真白き白百合の花も、紅き花びらのやすらかな

罌粟の花も。

なれど夏に育ち、冬に育まれる故、ともに捧げること

能わざるすべての花花。

されど 乙女よ、今はただ 泳ぎを学ばむと。

六〇

もし 海を渡りゆく船とともに 誰か異邦人

ここに來たるときに。

そのとき どれほどの安らぎが われの見る 深き海に

お住まいのあなたのもとに限りなきかを。

出でられよ、ガラテアさま、忘れ去って、われのごと

ここに座して！

われとともに 群れたちを 連れよき 乳を搾り

酸い凝乳酵素などを加え チーズを硬くして！

母のみ われを解せず われ反駁すれば、母 あなたの

ことを語りせば 言葉堪えて われのためにと

心篤き言葉。

母 われを見つめ 日増しに 憔悴し

われは打ち明けむ 湧きたつ 頭と二の足。

七〇

われも 悩ましき思いに苦難の日々

ともに分かち合いて。

おおキュクロプス キュクロプス

何処へ飛び行く キュクロプスの魂。

籠を編み 葉をあつめ 牡の仔羊たちに

食ませになされまし。

魂の安息 ことのほか やすらかに。

乳 搾ってあげなさい その牝牛の乳

なぜに 去るひとを 追いかけるのか。

いつの日か きっと 別のガラテアを、

ガラテアより麗しき乙女に めぐり合いましょう。

数多の乙女たち 美しき娘たち

むつまじく 楽しみあい 笑い喜々と われ

乙女たちに耳かたむれければ。

この地にて われもひとかどの男。

かく ポリフェモス お歌いあそばせられ、

恋の悲しみに 嘆く人 牧へ連れ行く

彼の人 生を過ごしぬ

たとい医者に黄金与えたとしても、

それよりも満る心。

### 【ローマ字翻字テキスト】

Ouden potton erota pephukei pharmakon allo,

Nikia, out' egchriston, emin dokei, out' epipaston,

E tai Pierides, kouphon de ti touto kai adu

Ginet' ep' anthropois, euren d' ou radion esti.

Ginoskein d' oimai tu kalos iatron eonta

Kai tais ennea de pephilemenon eksocha Moissais.

Outo goun raista diag' o Kukloph o par' amin,

Orchaios Poluphamos, ok' erato tas Galateias,

Arti geneiasdon peri to stoma tos krotaphos te.

Erato d' ou malois oide oude rodo oide kikinnois,

All' orthais maniais, ageito de panta parerga.

Pollaki tai oies poti touilion autai apenthon

Choras ek botanas, o de tan Galateian aeidon

Autos ep' aionos katetaketo phukioessas

Eks aous, echthiston echon upokardion elkos,

Kupridos ek megalas to oi epati pakse belemnou.

Alla to pharmakon eure, kathezomenos d' epi petras

Upselas ek ponton opon aeide toianta,

O leuka Galateia, ti ton phileont' apoballe,

Leukotera paktas potidein, apalotera arnos, Moscho gaupotera, phiarotera omphakos omas; Phoites d' auth' outos okka glukus upnos eche me, Oiche d' euthus iois' okka glukus upnos ane me, Pheugeis d' ospereis polion lukon athresasa; Erasthen men egoge teous, kora, anika praton Enthes ema sun metri thelois' uakinthina phulla Eks oreos drepsasthai, ego d' odon agemoneuon. Pausasthai d' esidon tu kai usteron oud' eti pa nun Ek teno dunamai, tin d' ou melei, ou ma Di' ouden. Ginosko, chariessa kora, tinos ouneka pheugeis Ouneka moi lasia men ophrus epi panti metopo Eks otos tetatai poti thoteron os mia makra, Eis d' ophthalmos upesti, plateia de ris epi cheilei. All' outos toitous eon bota chilia bosko, Tek touton to kratiston amelgomenos gala pino, Turos d' ou leipei m' out' en therei out' en opora, Ou cheimnos akro, tarsoi d' uperachthees aiei. Surisden d' os outis epistamai ode Kuklopon, Tin, to philon glukumalon, ama kemauton acidon,	20	Pollaki nuktos aori, trapho de toi endeka nebros, Pasas mannophoros, kai skumnos tessaras arkon. All' aphikeuso poth' ame, kai ekseis ouden elasson, Tan glaukan de thalassan ea poti cherson orechthein, Adion en tontro par' emin tan nukta diakseis. Enti daphnai tenei, enti radinai kuparissoi, Esti melas kissos, est' ampelos a glukukarpos, Esti, psuchron udor, to moi a poludendreos Aina Leukas ek chionos poton ambrosion proieiti. Tis ka tonde thalassan echein kai kumath' eloitō; Ai de toi autos egon dokeo lasioteros emen, Ai de toi autos egon dokeo lasioteros emen, Enti druos ksula moi kai upo spodo akamatōn pur, Kaiomenos d' upo teus kai tan psuchan anechoiman Kai ton en ophthalmōn, to moi glukeroterōn ouden. Omōi, ot' ouk eteken m' a mater bragchi' echonta, Os katedun poti tin kai tan chera teus ephilesa, Ai me to stoma les, epherōn de toi e krina leuka E makon apalan eruphra platagoni echoisan, Alla ta men thereos, ta de ginetai en cheimoni, Ost' ou ka toi tauta pherein ama pant' edunathen.	40
--	----	--	----

Nun man, o korion, nun autika nein ge matheumai,	60	Outo toi Poluphamos epoinainen ton erota	80
Ai ka tis sun nai pleon ksenos od' aphiketai,		Mousisdon, raon de diag' e ei chruson edoken.	
Os eido ti poch' adu katoikein ton buthon ummin.			
Eksenthois, Galateia, kai eksenthoisa lathoio,			
Osper ego nun ode kathemenos, oikad' apenthein,			
Pomainein d' ethelois sun emin ama kai gal' amelgein	65		
Kai turon paksai tamison drimeian eneisa.			
A mater adikei me mona, kai memphomai auta,			
Ouden pepoch' olos poti tin philon eipen uper meu,			
Kai taut' amar ep' amar oreusa me leptunonta.			
Phaso tan kephalan kai tos podas amphoterous meu	70		
Sphusdein, os aniathe, epei kegon aniomai.			
O Kuklops Kuklops, pa tas phrenas ekpepotasai;			
Ai k' enthon talaros te plekois kai thallon amasas			
Tais arnessi pherois, tacha ka polu malon echois non.			
Tan pareoisan amelge, ti ton pheugonta diokeis;	75		
Eureseis Galateian isos kai kallion' allan.			
Pollai sumpaisden me korai tan nukta kelontai,			
Kichlizonti de pasai, epei k' autais upakouso.			
Delon ot' en ta ga kegon tis phainomai emen.			